

親の声かけと子どもの発達に関する統合的理論枠組みの提案

—時間スケール別分析による親子相互行為研究の再編成—

A Proposal for an Integrated Theoretical Framework

on Parental Talk and Child Development

— Reorganizing Parent–Child Interaction Research through Time-Scale Analysis —

立部文崇・植田可織

I. はじめに

親の声かけは、子どもの言語発達および社会的発達に影響を与える重要な要因として、長く研究対象となってきた。Hart & Risley(1995)の「3000万語の格差」研究に代表される量的アプローチは、親の発話量、語彙の豊かさ、質問頻度などの指標と子どもの語彙発達やその後の言語発達との関連を明らかにし、その知見は教育政策にも大きな影響を与えてきた。

しかし近年では、発話量の多さと親子間の相互的なやり取りの質とが必ずしも一致しない可能性が、実証的にも示されつつある。例えば、Romeo et al. (2018)は、親から子どもへの発話の量よりも親子間の会話ターン数が子どもの神経活動や言語能力を強く予測することを示している。さらに、相互行為の質の内実として、La Valle et al. (2024)は、最小限の語彙を持つ自閉症児(48～95 か月)を対象とした研究で、親の随伴的応答が子どものコミュニケーション・モダリティ(音声、ジェスチャー、AAC)に関わらず一貫して提供されることを示し、親子相互行為における相互のプロセスの重要性を指摘している。これらの知見は、親の発話量そのものよりも、子どもの注意や行動に、どの程度適合した形で親の応答が行われているか、また「それが子どもの行動変化やその後の相互行為の連鎖にどのように関与しているか」といった点が重要であることを示唆している。

近年では、親の声かけを「相互行為の中で機能する行為」として捉える研究が進展しており、応答性・随伴性(responsiveness/contingency)、足場かけ・教示(scaffolding)、自律性支援 vs 統制(autonomy-supportive vs controlling language)、心的状態への言及(mind-mindedness)、強制過程(coercive process)などといった複数の潮流が確認できる。それぞれの潮流が、親の声かけが発達においてどのような機能を果たすかに関する重要な知見を蓄積している。

しかし、これらの潮流は、理論的背景、分析単位、時間スケールが互いに異なっている。例えば、応答性に関する研究は瞬間的なターン単位(数秒)に焦点を当てるのに対し、足場かけに関する研究は課題遂行過程(数分から活動全体)を、強制過程研究は長期的な相互行為パターンの蓄積(数ヶ月～数年)を主

な分析対象としている。このような時間スケールの相違は、各潮流における理論的関心や分析枠組みの違いとも関連している。その結果、「どのような声かけが、どのような発達機能を担うのか」という問いは、必ずしも統一的な枠組みのもとで説明されているとは言えない。こうした状況を踏まえ、本論文では、親の声かけを「子どもの行動と結びついた時間的に展開する相互行為」として捉え直し、「時間スケール依存的な機能変容」「動的な相互調整」「多層的時間モデル」という3つの統合的視点に基づき、既存の相互行為研究を時間スケール軸で再編成し、親の声かけが子どもの発達に与える影響をより包括的に理解するための理論的枠組みを提案することを目的とする。

具体的には、第Ⅱ章で量的アプローチの成果と限界を概観し、第Ⅲ章では既存研究を時間スケール(ミクロ・メゾ・マクロ)別に整理することで、各スケールにおける親の声かけの機能の違いを明らかにする。第Ⅳ章では、3つの統合的視点に基づき、親の声かけの動的機能を捉える理論的枠組みを提示し、第Ⅴ章では文化的多様性、発達の多様性、および介入研究を検討することで、提案した枠組みの適用可能性と課題について考察する。

なお、本論文は網羅的なシステムティックレビューを目的とするものではなく、親子の相互行為における言語行動と子どもの発達との関連を扱った主要な研究を対象に、理論的統合の観点から選定・再構成を行う理論統合型レビュー(theoretical integrative review)として位置づけられる。すなわち、本稿は既存の知見の単なる要約にとどまらず、それらを「時間スケール」という新たな次元で再編成し、今後の理論構築に向けた概念的基盤を提示することを目的としている。完成された理論の提示ではなく、今後の実証研究と理論的精緻化を導くための仮説的枠組みの提案を主眼とするものである。したがって、本稿における文献の選定は、機械的な網羅性よりも理論的構築への寄与を重視し、著者のこれまでの知見を基盤として行われた。具体的な採択基準として、(1)親の言語的働きかけ(声かけ、足場かけ、自律性支援など)と子どもの発達の成果の関連を実証的または理論的に扱っていること、ならびに、(2)本稿の核となる『時間スケール(ミクロ・メゾ・

マクロ)』のメカニズムを考察する上で重要な知見を提供している主要文献であること、を設定した。一方で、親の自然な相互行為を伴わない限定的な実験室研究や、本稿の多層的な理論枠組みに直接寄与しない研究については除外している。

II. 量的アプローチの成果と課題

1. Hart & Risley (1995)

親の発話量が子どもの発達に影響を与えることを示した Hart & Risley (1995) の知見は、重要な先行研究として広く参照されてきた。彼らは、異なる社会経済的地位 (socioeconomic status: SES) の 42 家族を対象に、子どもが乳児期から 3 歳までの約 2 年半の期間にわたり、定期的な家庭訪問によって親子の相互行為を観察し、親の発話特性と子どもの言語発達の関連を分析した。ここでの SES は、親の教育年数、職業、世帯収入などに基づいて階層化された指標であり、一般に高・中・低の 3 段階に分類されている。

彼らの研究で広く知られる「3000 万語の格差」は、観察データをもとにした累積語数の推定に基づくものである。Hart & Risley は、親の発話量や語彙の多様性、肯定的・否定的フィードバックの頻度などの指標が、3 歳時点での子どもの語彙量と強く関連し、さらに後の学業成績とも関連することを示した。この研究は、早期の言語環境とその後の発達との関連を示した点で大きな影響を与えた。

その後、こうした知見は Early Head Start などの早期介入プログラムの議論とも関連づけられ、多くの教育現場で「子どもに語りかけることの重要性」が強調されるようになった。日本を含む多くの国でも、この研究の知見を踏まえ、親の語りかけや言語環境に働きかける介入プログラムが開発・実施されている。

2. 量的アプローチの発展と普及

Hart & Risley の研究以降、量的パラダイムに基づく研究が急速に蓄積された。Gilkerson et al. (2017) は、「LENA (Language ENvironment Analysis)」システムによる自動録音装置を活用し、家庭内の言語環境の大規模データ収集・分析を実施した。これにより、親の発話量に加え、会話ターン数などの指標が言語発達と関連することが示されている。

さらに Suskind (2015) の「Thirty Million Words Initiative」は、こうした知見を基盤としつつ、一般向けに普及させた取り組みである。彼女は、3 つの指針「Tune In (注意を向ける)」、Talk More (たくさん話す)、Take Turns (順番に会話する)」を提唱し、親の実践的なガイダンスを提示した。「Talk More」は発話量の重要性を強調する指針であり、「Take Turns」は相互的なやり取りの重要性を示すものである。

このように、量的アプローチは、その簡潔性と測定可能性の高さから、研究領域にとどまらず実践へと広く普及した。

3. 量的パラダイムの限界

前節で述べたような発展の一方で、近年では量的指標と発達成果の関連について、従来の単純な因果関係ではなく、複数の要因の相互作用が関わることが明らかにされている。

第一に、「量」と「相互性」の区別である。Romeo et al. (2018) は、親の発話数そのものよりも、親子間の会話ターン数、つまり双方向的な相互行為の頻度が、子どもの神経活動(fMRI による言語関連脳領域の活動)と言語発達とより強く関連することを示している。言い換えれば、一方的な語りかけよりも、双方向的な「相互性」が発達に資する可能性が高いということになる。第二に、「質的側面」の重要性である。親の随伴的な応答 (contingent response) が言語・社会性発達に関連することは広く指摘されており、例えば La Valle et al. (2024) は ASD 児を対象に、子どもの多様なモダリティ (音声、ジェスチャーなど) に関わらず親から一貫した随伴的な応答が提供されることを示すなど、相互行為の「質」に着目した研究が進展している。これは、量的指標では捉えられない相互行為の「質」が重要であることを示唆している。第三に、SES 別の言語環境差異の再検討である。Sperry et al. (2019) は、複数のアメリカのコミュニティにおける親子相互行為を観察し、Hart & Risley の「3000 万語の格差」が必ずしも普遍的ではなく、その一般化には慎重であるべきことを示唆した。特に、SES によって親の関わり方のスタイルが異なり、発話数の差異が必ずしも発達格差に直結しないケースも報告されている。

これらの知見は、発話量のみでは親子の相互行為による発達の機能を十分に説明できないことを示しており、相互性や応答の質、文脈といった側面を含めた分析が必要であると言える。

4. 本章の結論

本章で概観したこれらの最近の知見は、親の声かけを評価する際に、「発話数」という単一の指標では不十分であることを示している。むしろ重要なのは、親の声かけが「子どもの注意や行動にどの程度適合しているか」、その声かけが「子どもの行動変化とどのように関連するか」、そしてそれが「どのような相互行為の連鎖を形成するか」という、相互行為の動的な側面である。量的パラダイムは、測定可能性と汎用性において優れており、大規模な縦断研究を通じて因果関係を推定する上で有用である。しかし、発話数や語彙の多様性といった量的指標では、相互行為の機能的側面を十分に捉えることはできない。親の声かけを「相互行為の中で機能する行為」として捉え直すことが、子どもの発達メカニズムをより深く理解するために不可欠と言える。

第Ⅲ章では、この「相互行為の機能」を時間スケールの観点から整理し、既存の相互行為研究を統合的に概観する。

Ⅲ. 相互行為研究における時間スケール別分類

1. ミクロスケール研究(秒～数十秒単位のターン交代)

本節では、ミクロスケールにおける主要な研究の潮流を、親の応答の対象に着目して整理する。具体的には子どもの外

的行動への応答を扱う研究と、子どもの内的状態の言語化を扱う研究とを区別して検討する。

ミクロスケール研究では、親と子の発話交換（ターン）を最小単位とし、数秒から数十秒単位の相互行為が分析対象となる。これは、情報が一時的に保持され処理される作動記憶（Baddeley, 1986 等）の形成単位にほぼ対応している。この時間スケールでは、子どもの即時的な行動や注意の変化に対する親の応答、および親子が共有する心的状態（子どもが何を考えているか、何を感じているか）への親の言語化が焦点となる。

a. 潮流 A：応答性・随伴性（Responsiveness/Contingency）

応答性に関する研究は、親が子どもの注意や行動に対して、いかに即時的かつ適切に応答するかを分析している。

Tomasello & Farrar (1986) の古典的研究では、親が子どもの視線や指差しの方向に注意を向け、その対象を言語化する「共同注意（joint attention）」が、子どもの語彙獲得に重要であることを示した。例えば、子どもが窓の外を指さしたとき、親が「あ、お花だね」と子どもの行動に随伴して反応することが、子どもの言語学習を促進するというものである。Tamis-LeMonda et al. (2001, 2014) の一連の研究では、親の応答性が子どもの言語的なマイルストーン達成と強く関連し、特に親が子どもの発話や行動に「意味を付与する」応答（contingent elaborative response）が重要であることを実証した。例えば、子どもが「わんわん」と言ったとき、親が単に「そうね、わんわんだね」と繰り返すのではなく、「わんわんがいるね。大きい声で吠えてるね」と拡張して応答することの効果が示されている。

応答性に関する研究は、瞬間的な親子のターン交換に焦点を当てることで、子どもの学習メカニズムをミクロレベルで解明している。加えて、Romeo et al. (2018) は、fMRI を用いて、会話ターン数（量ではなく相互交換の頻度）が子どもの言語関連脳領域の活動と関連することを示し、応答性に関する研究の神経科学的側面からの妥当性を支持している。

b. 潮流 B：心的状態への言及（Mind-mindedness）

心的状態への言及に関する研究は、親が子どもの内的心理状態（欲求、感情、意図、信念など）を言語的に表現することの発達の効果を検討している。Meins et al. (2001, 2002) は、親が子どもの心的状態に適切に言及する「マインドマインデッドネス（mind-mindedness）」が、子どもの愛着安定性および心の理論（theory of mind：ToM）の発達と関連することを報告している。例えば、泣いている子どもに対して、親が「泣いてるね」と単に行動を述べるのではなく、「お母さんがいなくて、さびしくなっているのかな」と子どもの内的心理状態を言語化する発話がこれにあたる。Tompkins et al. (2018) の研究でも、親による子どもの心的状態に対する言及が子どもの社会的な認知発達と関連することが確認されている。

応答性に関する研究と心的状態に言及した研究は、共にミクロスケールで親子相互行為を分析する点で共通しているが、応答性が「子どもの外的行動への応答」に焦点を当てるのに

対し、心的状態への言及は「子どもの内的状態の言語化」に焦点を当てる。両潮流は、ターン単位の相互行為における親の「子どもへの同調能力（attunement）」の異なる側面を捉えており、相補的に親の質的機能を明らかにしている。

これらのミクロスケール研究の強みは、秒単位での精密な分析により、親と子がどのように相互調整を行うのかを逐次的に捉えられる点にある。しかし、ターン単位の分析に限定されると、より大きな単位での相互行為のパターン（例えば、課題解決過程や複数ターンにわたる会話の流れ）を十分に捉えきれない可能性がある。また、強制過程のような長期的な相互強化のパターンは、この枠組みでは十分に把握することが難しく、後述するマクロスケールの分析が必要となる。

2. メゾスケール研究（分～十数分単位のエピソード）

本節では、ミクロスケールで見られた相互行為が、より長い時間スケールにおいてどのように組織化されるかに着目し、同一領域に属する研究潮流をメゾスケールの観点から整理する。メゾスケール研究とは、1つの課題・活動・経験を共有するエピソード全体を分析単位とする研究領域である。つまり、特定の時間・空間的文脈を持つ単一の出来事として捉えられるエピソード記憶（Tulving, 2002）の形成単位にほぼ対応している。この時間スケールでは、単一のターンへの応答ではなく、複数のターンにまたがる相互行為の連鎖を通じて、親が子どもの行動や理解をどのように方向づけていくかが焦点となる。具体的には、親が子どもに対して段階的な支援を行い、経験に意味を付与しつつ、自発性を損なわないようにどのように調整するかといった、より長い時間幅の中で形成される相互行為のパターンが分析対象となる。

a. 潮流 C：足場かけ・教示（Scaffolding）

足場かけに関する研究は、Vygotsky (1978) の「最近接発達領域（zone of proximal development: ZPD）」の概念に基づき、親が複数ターンにわたる相互行為の中で、子どもの実行機能や問題解決能力を段階的に支援していく過程を検討している。Hammond et al. (2012) は、母親の足場かけの質、すなわち課題の難易度に応じた適切なヒントの提供や、子どもの習熟に応じて支援を徐々に減らしていく調整が、子どもの実行機能の発達と関連することを報告している。例えば、「ブロックで塔を作る」という課題において、親は初期には「積み重ねるんだよ」と示唆的に支援する。その後、子どもの試行錯誤を見守りつつ、必要に応じてより具体的な指導（「ここにこう置くんた」）へと段階的に移行する。このような支援の調整が、足場かけの典型例である。Bodrova & Leong (2007) は、Vygotsky 的な枠組みに基づき、養育環境における大人の言語的足場かけが子どものプライベートスピーチ（self-directed speech：子どもが自分の行動を調整するために行う自己指向的な発話）の発達を促進し、それが内化された思考へと移行する過程を示している。

b. 潮流 D : 語りの共同構成 (Narrative Scaffolding)

語りの共同構成に関する研究は、親と子が共に過去の経験を語りながら、その出来事を時間的・因果的・感情的に構造化していくプロセスを分析対象としている。Nelson & Fivush (2004) は、親が子どもの発話を拡張し、経験に時間的・因果的な構造を与え、さらに感情的な意味付けを行うことが、子どもの自伝的記憶形成および自己理解の発達に寄与することを報告している。

足場かけに関する研究が主に課題遂行や問題解決の支援に焦点を当てるのに対し、こうした研究は、経験に意味を付与し、それを物語として組織化する過程に焦点を当てる。例えば、「今日の公園は楽しかった？」という親の問いに対し、子どもが「楽しかった」と簡潔に答えたとき、親が「そっか。ブランコに乗った時、すごく高く飛んだね。どう感じた？」と拡張して質問し、子どもの経験をより詳細で構造化された物語へと共同で構成していく。こうした相互行為が典型例である。Peterson & McCabe (1992) は、親がこのような拡張的な問いかけを行う家庭の子どもほど、後に自らの経験などを語る能力が高いことを示している。

c. 潮流 E : 自律性支援 vs 統制 (Autonomy-supportive vs Controlling Language)

自律性の支援に関わる研究は、自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT) に基づき、親がエピソード全体を通じて子どもの行動選択や動機づけをどのように調整するかを検討している。親の非統制的な言語や選択肢提示が、子どもの内発的動機づけおよび規則の内在化にどのように結びつくかが主な関心である。Laurin & Joussemet (2017) は、親が理由を説明し選択肢を提示する「自律支援的」な声かけが、単に指示を与える「統制的」な声かけよりも、幼児の規則内在化、つまり外的な強制によらず規則を自らの価値として受け入れて行動することを促進すると報告している。例えば、片付けの場面で、統制的な親は「片付けなさい」と命令するのに対し、自律支援的な親は「おもちゃがいっぱいで、歩くのが大変だね。どうしたら良いと思う？」と問いかけ、子どもの提案を尊重する。また Katz & Assor (2007) は、教室文脈で理由説明が学生の内発的動機づけを促進することを示しており、親が片付けなどの養育場で「片付けないと、誰かが踏んで壊れてしまうかもしれないね」と理由を説明する場合にも、同様の効果が期待される。

以上のメゾスケール研究を整理すると、足場かけ、語りの共同構成、自律性支援はいずれもエピソード単位のプロセスを扱うが、その焦点は異なる。足場かけは「認知的な問題解決への支援」、語りの共同構成は「経験の意味化と自己形成」、自律性支援は「動機づけと内在化」にそれぞれ特化している。しかし、これら 3 つの潮流が描写している親の声かけ(例えば「質問」)は、実際には相互に重なり合う可能性がある。つまり、単一の発話が「足場かけの機能」「経験の意味化」「自律性支援」といった複数の機能を同時に担うという問題が

ここで浮上する。

メゾスケール研究の強みは、1 つのエピソード全体を通して、親の支援がいかに関段的に展開されるのか、またその支援が子どもの発達の課題(問題解決、経験の意味化、動機づけ)とどのように関わるのかを明らかにできる点にある。しかし、複数のエピソードにわたる相互行為パターンの蓄積(例えば、「この家族では一貫して指示的なやり取りが行われる」といった長期的傾向)は、メゾスケール研究では十分に検討されない。また、同一の親の声かけが複数の潮流において異なる機能として記述されることは、各潮流が異なる機能単位を前提としていることを示唆するが、その統合はメゾスケールの枠内では十分に達成されていない。

3. マクロスケール研究 (月～数年単位の発達過程)

マクロスケール研究とは、数ヶ月から数年にわたる長期的な親子相互行為パターンの蓄積と、その発達成果への影響を分析する研究領域である。日々の相互行為の反復が関係性のパターンとして習慣化し、ひいては神経可塑的な変化を伴いながらマクロな発達軌跡を形作る時間単位にほぼ対応しているとも言える (Romeo et al., 2018 等)。メゾスケール研究が単一のエピソードにおける支援過程を扱うのに対し、この時間スケールでは、繰り返して生じる相互行為が習慣化・パターン化され、安定した関係様式として定着していく過程が焦点となる。こうした長期的な相互行為パターンが、子どもの発達課題(問題行動の形成、社会性・情動発達)にどのように関与するかが主たる分析対象となる。

a. 潮流 F : 強制過程 (Coercive Process)

強制過程に関わる研究は、Patterson (1982) の社会学習理論に基づき、親の否定的声かけ→子どもの拒否・癈癢→親の譲歩という相互強化サイクルが、反復を通じて安定した相互行為パターンとして定着し、子どもの問題行動を形成する過程を分析している。Wakschlag et al. (2007) が幼児期の破壊的行動を正常な反抗と区別する枠組みを示したように、怒りやすさ (irritability) などの特性は行為問題の核となる。さらに、こうした子どもの特性は親の厳しい統制を引き出しやすく、相互強化のサイクルを悪化させることが指摘されている。例えば、子どもが親の指示に従わず、親が「言うことを聞きなさい！」と大声で怒ると、子どもはさらに抵抗し、最終的に親が「もういい、好きにきなさい」と譲歩する。こうしたパターンが繰り返されると、子どもは「親が強い否定的反応を示すまで指示に従わない」という行動を学習し、親の指示が機能しにくくなる。Dishion et al. (2008) の Family Check-Up 研究では、このような長期的な相互強化パターンを改善することで、子どもの問題行動が減少することが示されている。マクロスケール研究のもう一つの重要な焦点は、親の個性差(実行機能、心理的資源、ストレス水準など)が、長期的な相互行為パターンの形成にどのように関与するかという点である。Deater-Deckard et al. (2010) は、母親の実行機能(特にワー

キングメモリ)が低い場合、子どもの問題行動に対する反応的な負性 (reactive negativity) が高まり、その結果として強制過程に陥りやすくなることを示している。

同様に、Scaramella et al. (2008) の 3 世代縦断研究は、親が経験した社会経済的困窮が早期の親への移行 (若年での出産・育児) を促し、その負担や準備不足が厳しい養育 (harsh parenting) のパターンを形成し、最終的に子どもの外在化問題へと結びつくことを報告している。これらの研究は、親の個性差が相互行為パターンの形成に関与するメカニズムを示唆している。

マクロスケール研究の強みは、長期的な相互行為パターンと子どもの発達成果の関連を実証的に示す点にある。特に縦断研究により因果関係を一定程度推定できることが利点である。しかし、長期的なパターンの形成メカニズムについては、ミクロおよびメゾレベルでの相互行為がどのように積み重なるのかという時間的な層構造を十分に説明する枠組みを必ずしも提供しない。すなわち、ミクロレベルのターン交換の蓄積がメゾレベルのエピソード構造を形成し、それがマクロレベルの発達成果へと連なるという動的な因果連鎖は、マクロスケール研究のみでは十分に明らかにされていない。

4. 時間スケール別分類の意義

以上、ミクロ・メゾ・マクロという 3 つの時間スケールで、既存の相互行為研究の潮流を整理した。各スケールの研究は、それぞれの時間枠の中で、親の声かけの重要な側面を明らかにしている。応答性と心的状態への言及は、秒単位での子どもの同調的な応答を実証し、足場かけ・語りの共同構成・自律性支援は、分単位でのプロセスの複雑性を描写し、強制過程と親の個性差は、月～数年単位での相互行為パターンの習慣化を明らかにしている。

しかし同時に、この時間スケールの相違が、潮流間の理論的な統合を困難にしていることも明らかである。具体的には、同じ親の「指示」が、応答性に関する研究では「子どもの行動への随伴的応答」として、足場かけに関する研究では「課題解決への段階的支援」として、自律性支援に関する研究では「統制 vs 自律性支援」として、異なる観点から記述される可能性がある。これは、親の同一の言語行為が、異なるスケールで、異なる機能を果たしている可能性を示唆している。

また、メゾスケール研究における 3 つの潮流 (足場かけ、語りの共同構成、自律性支援) が扱う親の声かけは、実際には相互に重なり合い、同一の相互行為が複数の潮流において異なる機能として記述されていることも見て取れた。これらの観察は、既存の相互行為研究の理論的統合が単なる知見の集約ではなく、親の声かけの機能を新たな観点から再理論化することを不可欠とするものであることを示している。第 IV 章では、この課題に対して、時間スケールに依存した機能変容、動的な相互調整、多層的時間モデルという 3 つの視点に基づいた統合的枠組みを提示する。

IV. 統合的理論枠組み

第 III 章では、既存の相互行為研究を時間スケール別に整理し、各潮流の特徴と相対的な限界を示した。本章では、これらの理論的に十分統合されていない各潮流を対象に、親の声かけの機能が時間スケールをまたいでどのように成立するのかを統一的に説明する理論的枠組みを提案する。その中核は、時間スケールに依存した機能変容、動的な相互調整、多層的時間モデルという 3 つの相互に関連する視点である。

1. 時間スケールに依存した機能変容の視点

まず時間スケールに依存した機能変容とは、同一の言語形式 (例えば親の「質問」や「指示」) が、どの時間スケールで捉えられるか、またこれまでにどれだけのやり取りが積み重なってきたかによって、その発達の機能を変えていくという視点である。つまり、親の声かけの機能は、言語形式そのものによって固定的に決まるのではなく、その声かけが生じる時間スケール、その時点での子どもの状態、およびそれまでの相互行為の履歴によって動的に決定される。

第 III 章で示した具体例を再度参照する。Tamis-LeMonda et al. の応答性に関する研究では、子どもが「わんわん」と言ったとき、親が「そうね、大きいわんわんだね」と拡張応答することの効果が論じられた。一方、Peterson & McCabe の語りの共同構成に関する研究では、親が「公園で何があった？」と問い、子どもの答えに対し「ブランコに乗ったのね。どう感じた？」と拡張することの効果が論じられた。

表面的には、親の「拡張応答」という言語行為は同じ形態である。しかし、その発達の機能は異なる。Tamis-LeMonda の例では、親の拡張応答は子どもの即座的な発話に対する応答であり、その機能は「子どもの言語学習の促進」(ミクロスケール) である。Peterson & McCabe の例では、親の拡張応答はより大きな会話エピソード内での問いかけであり、その機能は「経験の構造化と自己形成」(メゾスケール) である。

従来の相互行為研究は、親の言語を「指示／質問／拡張」といった発話行為のカテゴリで分類し、各カテゴリに固定的な発達機能を対応させてきた。これに対し本論文は、「時間スケールに依存した機能変容」という視点から、同一の発話行為であっても、それが生起する時間スケールに応じて異なる発達の役割を果たすという動的な機能理解への転換を提唱する。具体例として、親の「質問」というカテゴリに属する同じ言語行為を考える。

【例 1：ミクロスケール (秒～数十秒)】 子どもが遊びに集中せず注意散漫なとき、親が「何してるの？」と質問する。ここでの質問の機能は「子どもの注意を現在の活動に向けさせる」ことである。

【例 2：メゾスケール (数分)】 子どもがパズル課題に取り組んでいるとき、親が「何してるの？」と質問する。ここでの質問の機能は「子どもの思考過程を言語化させ、問題解決方略を意識化する」ことである。

【例3：マクロスケール(数ヶ月～数年)】日常的に子どもの活動に対して親が「何してるの？」と肯定的に問いかけるパターンが習慣化されることで、子どもは自分の行動を言語化し振り返る習慣を獲得する。ここでの質問の機能は「自己理解と内発的動機づけの長期的形成」である。

ここで、同一の発話が複数の機能を持つ「機能多重性(polyfunctionality)」と、本稿が提唱する「機能変容」を明確に区別しておきたい。同じ「質問」が状況に応じて注意喚起や思考促進として働くのは、共時的な「機能多重性」である。一方「時間スケールに依存した機能変容」とは、最初はミクロな注意喚起であった「何してるの？」という問いかけが、経験の蓄積とともにメゾスケール(思考の言語化)、マクロスケール(自己理解)へと段階的に高次化していく通時的プロセスを指す。このように、同じ言葉の反復が時間をかけてより長期的な発達を支える機能へと変化することこそが「機能変容」の核心である。

つまり、同じ「質問」というカテゴリに属する言語行為であっても、その発達の機能は時間スケールに応じて変容する。重要なのは「この発話は何というカテゴリか」という形式的分類ではなく、「この発話は、ミクロ・メゾ・マクロのどの時間スケールにおいて、子どもの発達にどのように機能し、それがどのような変容プロセスを辿るのか」という時間スケール依存的な機能分析の視点である。これこそが、本論文が提唱する理論的転換の核心と言える。

この「形式ではなく機能に注目する」という視点の転換は、Gibson (1986) および Turvey (1992) の生態心理学に基づいている。生態心理学では、環境の意味は物理的特性それ自体に内在するのではなく、主体と環境との関係性の中で成立すると考える。したがって、環境を理解するうえで重要なのは、それがどのような物理的特徴を持つかだけでなく、主体に対してどのような行為の可能性を提供するかである。この主体と環境の関係性を記述する概念が Affordance (行為可能性) である。

例えば、階段の段差という同一の物理的構造であっても、幼い子どもにとっては上りにくい障害物として、大人にとっては容易に上れる移動手段として知覚される。この違いは段差そのものの変化によるものではなく、主体の身体的能力との関係によって異なる行為可能性が成立するためである。

Gibson (1986) はさらに、環境における最も豊かで複雑なアフォーダンスは他者によって提供されると論じている。彼は「Behavior affords behavior (行動は行動をアフォードする)」と述べ、他者の行動が新たな行動の可能性を生み出すことを指摘した。つまり、アフォーダンスは物理環境だけでなく、社会的相互作用にも存在する。この観点から見ると、子どもの発達の文脈における親の言語行為もまた、子どもの注意、応答、思考、語りなどの行動を方向づける社会的アフォーダンスとして理解することができる。親の発話の意味は、「質問」「指示」「拡張応答」といった形式カテゴリーのみによって決定されるのではなく、その発話がその時点の子どもに対して

どのような行為可能性を開くのかによって規定されるのである。

したがって、同じ「質問」という形式であっても、注意散漫な子どもには「注意を向けさせる行為」として、課題に集中している子どもには「思考を深める行為」として、それぞれ異なる Affordance を持つと言える。

2. 動的な相互調整と最適化

前節で示した時間スケールに依存した機能変容は、親の声かけの発達の機能が時間スケールに応じて変容することを説明するものであった。本節では、その機能がいかにして個々の子どもに対して最適化されるかというプロセスを検討する。

第二の視点は、親の声かけは、子どもの特性に対する静的な処方箋ではなく、瞬時のフィードバックループの中で調整される動的なプロセスであるということである。

第Ⅲ章で示した応答性に関する研究は、親が子どもの行動に「即時的に」応答することの重要性を示している。しかし、この「即時的な応答」が全ての子どもに同じ効果を持つわけではない。例えば、La Valle et al. (2024) は、最小限の言語能力を持つ自閉スペクトラム症(ASD)児において、子どもの発信のモダリティ(身振りや音声、AACなど)や形式が異なっても、親が一貫して随伴的応答を提供していることを報告している。この知見は、親がASD児の個別の特性や多様な発信方法に合わせて、自身の応答の枠組みを柔軟に「最適化」し、どのような発信形態であってもコミュニケーションとして拾い上げていることを示唆している。実際、ASD児の多くは視線接触や微笑みといった社会的シグナルの理解に困難を抱えるため、定型発達児に有効な標準的応答パターンが必ずしも最適に機能するとは限らない。したがって、親には個々の子どもの発達特性に応じた「最適化された」応答パターンへの調整が求められる。

本論文では、このプロセスを「動的な相互調整と最適化」として理論的に位置づける。ここでいう最適化とは、特定の子どもの発達特性と、その時点での発達課題に対して、親の応答パターンが適応的に調整されるプロセスを指す。この適応性は、子どもの行動的・情動的反応によってフィードバックされ、親の次の応答を方向づけるという循環的な構造を持つ。同時に、第Ⅲ章で論じた親の個体差も、この動的調整に影響を与える。Deater-Deckard et al. (2010) の研究では、親の実行機能(ワーキングメモリ等)が低い場合、子どもの行為問題に対する反動的な負性が高くなることが示されている。これは、親自身の認知的資源の制約が、親の声かけの適切さを損なうメカニズムを示唆している。

しかし注目すべきは、このメカニズムは「一方向的」ではないということである。親の実行機能が低くても、子どもの気質が「扱いやすい」(低い負の感情反応性、高い適応性)であれば、親は「最適化された」応答をより容易に発揮できるだろう。逆に、親の実行機能が十分でも、子どもの気質が「難しい」(高い負の感情反応性、低い柔軟性)であれば、親は不適

切な応答パターンに陥りやすいかもしれない。つまり、動的な相互調整は、親と子のダイアディック（二者間）なプロセスであり、親の実行機能と子どもの気質が相互に作用し、その時々での最適な応答パターンを規定する。その結果として生じる親子相互行為は、単なる「親から子への一方的影響」ではなく、時間とともに変動する適応的な相互性と言える。

3. 多層的時間モデル

第三の視点は、親子相互行為が、複数の時間層（マイクロ・メゾ・マクロ）から成り立ち、各層の相互作用が次の層を形成するという多層的時間構造である。本モデルでは、親子の相互行為を、マイクロ・メゾ・マクロの各時間層が相互に影響を及ぼしながら、親子相互行為の機能とプロセスを形成する動的な多層システムとして捉える。

表 1 に、マイクロ・メゾ・マクロの各スケールでの相互行為の特徴と、親の声かけの主要な機能を整理した。

この表が示すように、各時間スケールは異なる分析単位と時間枠を持ちながらも、相互に関連している。重要なのは、これらの層が単なる「大きさの異なる単位」ではなく、相互に形成し合う動的な関係にあるということである。

【マイクロからメゾへ】ミクロスケールでの応答性の積み重ねが、メゾスケールでの足場かけや語りの共同構成を可能にする。例えば、Tamis-LeMonda らが示したような、親がミクロスケールで子どもの発話に即座的に応答し、その内容を拡張するというやり取りがある。本モデルの観点からすれば、こうしたやり取りが数回積み重なることで、やがてその応答パターンがより大きなエピソード全体を構造化するメゾスケールの語りの共同構成へと発展していくと考えられる。子どもの「公園は楽しかった」という発話への親の即座的応答（応答性）が、やがて「ブランコに乗った」という詳細な語りの共同構成（メゾレベル）へと発展するのである。

【メゾからマクロへ】メゾスケールでの相互行為パターンの繰り返しが、マクロスケールでの習慣化された親子関係を形成する。例えば、親が毎日、子どもの課題への取り組みに対して一貫した足場かけを提供する場合、その積み重ねは、子どもの実行機能発達と親の「このように支援する親」というアイデンティティの形成へと結びつく。逆に、親が子どもの行為に対して一貫して否定的・反応的な応答を行う場合（強制過程）、その繰り返しは、行為問題の長期的な形成へと向かう。

【マイクロの変化がマクロに波及するメカニズム】Thelen & Smith (2006) の動的システム論の観点からすれば、ミクロレベルでの小さな変化の蓄積が、やがて質的な転換をもたらす。例えば、Suskind et al. (2016) の介入研究では、親への指導を通じて、ミクロスケール（会話ターン数の増加）での変化を起こしたことで、子どもの言語発達指標にも改善がもたらされたことが報告されている。この結果は、ミクロレベルの変化がメゾスケールでの相互行為パターンを経由してマクロレベルの発達成果に影響するという、本モデルの理論的予測と整合している。

第 1 表 時間スケール別、親子相互行為と親の声かけの機能

時間スケール	分析単位	時間枠	親の声かけの主要機能	対応する潮流	関連する発達成果
ミクロ	ターン(親発話→子行動→親応答)	秒～数十秒	子どもの行動・心的状態への即座的応答	応答性・随伴性/心的状態的言及	言語学習、共同注意の成立、愛着安定性
メゾ	エピソード(1つの課題・経験の共有)	分～十数分	段階的支援、経験の意味化、選択と内在化	足場かけ/語りの共同構成/自律性支援	問題解決能力、自伝的記憶、内発的動機づけ
マクロ	相互行為パターン(習慣化された親子関係)	月～数年	相互強化パターンの形成・維持または改善	強制過程/親の個性差による最適化	行為問題の形成・改善、長期的発達軌跡

(出所：筆者作成)

同時に重要なのは、この関係が一方的ではないということである。親の個性差や家族の社会経済的状況（マクロレベルの文脈）は、メゾスケールでの足場かけの質を規定し、やがてミクロスケールでの応答性の発揮まで影響を及ぼしうる。例えば、Scaramella et al. (2008) の研究では、社会経済的困窮という「マクロな環境条件」が、親の心理的ストレスを増加させ、その結果、日々の親子相互行為（マイクロ・メゾ）が厳しく、反応的になることが示されている。つまり、マイクロ↔メゾ↔マクロは、一方的な「積み重ね」ではなく、相互に影響し合う多層的な構造と言える。このプロセスは、以下の循環モデルで示すことができる。

ミクロ（秒単位の応答）

↓↑蓄積

メゾ（分単位のエピソード）

↓↑習慣化

マクロ（月～数年単位のパターン）

↓↑制約・文脈設定

ミクロ（次の応答の可能性を規定）循環

第 1 図 多層的時間モデルにおける循環

(出所：筆者作成)¹⁾

機能変容を駆動するメカニズムは、第 1 図に示した「蓄積と制約の循環」である。ミクロな「応答」が反復・蓄積されてメゾレベルの「エピソード」となり、それが習慣化してマクロな

「関係性パターン」として定着する。同時に、形成されたマクロな関係性は、次のミクロなやり取りにおいて、親の発話が子どもにどのような行為可能性 (Affordance) を開くかを制約し、方向づける基盤となる。このように、下位スケールの反復が上位の機能を形成し、上位の文脈が下位の機能を規定する双方向のプロセスによって、機能は変容・移行していくのである。例えば、親の経済的ストレス (マクロ) は、日々の応答性 (ミクロ) を制約し、その積み重ねが親子の相互作用パターン (メゾ) を形成し、やがて長期的な親子関係様式 (マクロ) を規定する。同時に、毎日の応答的な対話の蓄積 (ミクロ→メゾ) が親のストレス軽減や自己効力感の向上をもたらし、マクロレベルの親子関係を改善するという正の循環も生じ得る。このように、本モデルは複雑な多層的相互作用を表している。

4. 3つの視点の統合と境界

上述の3つの視点「時間スケールに依存した機能変容」「動的な相互調整」「多層的時間モデル」は、相互に補完し合うことで既存の相互行為研究の理論的統合を可能にする。具体的には、何が変容するかを示す第1の視点、誰に対して最適化されるかを示す第2の視点、どのように各層が相互形成するかを示す第3の視点が、一体的な理論枠組みを構成している。

時間スケールに依存した機能変容の視点は、同一の言語形式 (例えば「拡張応答」) が、異なるスケールで異なる機能を果たすことを説明する。これにより、ミクロスケール研究とメゾスケール研究が、同じ現象の異なる側面を描写していることを明らかにする。

動的な相互調整のモデルは、親の応答パターンが子どもの特性や状況に応じて調整されるプロセスを強調し、「最適な養育」が状況的・個体的に多様でありうることを示唆する。例えば、自閉スペクトラム症児が用いる多様な発信形態 (音声、ジェスチャー等) のいずれに対しても、親が一貫して随伴的に応答していることを示した La Valle et al. (2024) の知見も、親が子どもの特性に合わせて自らの応答の枠組みを柔軟に最適化している「動的な相互調整」のプロセスとして統合的に理解される。

多層的時間モデルは、ミクロ・メゾ・マクロが相互に形成し合う関係性を示し、各潮流が異なる時間スケールで親の声かけの機能を捉えていることの必然性を示す。さらに、介入研究がミクロレベルの変化 (会話ターン数の増加) を起点として、マクロレベルの発達成果 (言語発達) に影響をもたらすことを説明する。

しかしながら、本枠組みにも限界がある。潮流 E (自律性支援 vs 統制) については、本章で提示した時間スケール軸により、自律性支援に関する研究と応答性・足場かけに関する研究の関係が部分的に統合された。自律性支援の「視点承認」はミクロレベルでの子どもの自己理解促進であり、メゾレベルでの「選択肢提示」と相互作用しながら、マクロレベルの「内在化された自己規制」へと発展していくことが示唆される。しかし、この統合がさらに詳細な実証研究により検証される

必要性が残されている。具体的には、自己決定理論 (SDT) に基づく「自律性支援」と応答性・足場かけに関する研究の統合には、親の「非統制的な質問」と「段階的サポート」の発達の機能差を、実験的ないしは縦断研究デザインで検証する必要がある。

同様に、潮流 D (語りの共同構成) とメゾスケール研究全般との関係性についても、より精密な理論的整理が必要である。語りの共同構成が、他のメゾスケール現象 (足場かけ、自律性支援) とどのように区別され、どのように統合されるべきかは、本論文の範囲を超える課題である。ただし、語りの共同構成の「時系列的・因果的な経験の言語化」という機能が、足場かけの「スキル習得支援」や自律性支援の「選択肢提示」とは発達的に異なる役割を果たしうることは、今後の研究で検証する価値がある。

これらの限界があるものの、本章で提示した3つの視点は、既存の相互行為研究を時間スケール軸で再組織化し、親の声かけの多面的な機能を統合的に理解するための有用な枠組みを提供する。第V章では、文化的多様性と発達の多様性を踏まえながら、本枠組みの実践的応用の可能性と課題を検討する。

V. 文化的・発達の多様性と実践的応用

1. 文化的多様性と親子相互行為の機能

本論文で提示した3つの統合的視点 (時間スケールに依存した機能変容、動的相互調整、多層的時間モデル) は、主に欧米の中流家庭を対象とした研究に基づいている。しかし、親の声かけが果たす発達の機能は、文化的背景によって大きく異なる。

LeVine et al. (1994) のケニア・グシイ族における親子相互行為研究は、西欧で重視される「教示的会話」よりも「身体的接近と非言語的応答」が乳幼児の安全感と社会的結合に優先される文化が存在することを示した。この知見は、時間スケール依存的な機能変容の視点から見ると、ミクロスケールでの親の応答が必ずしも言語的形式をとらない可能性を示唆しており、本論文の枠組みが言語的相互行為に偏重している可能性を指摘している。同様に、Rogoff et al. (2016) の複数文化比較研究では、メキシコ系アメリカ人家庭とヨーロッパ系アメリカ人家庭で、親の「指導的足場かけ」の形態と子どもの「自律的学習への期待」が異なることが示されている。ヨーロッパ系家庭では詳細な言語的指示が一般的である一方、メキシコ系家庭では子どもが大人の活動を観察し自発的に参加する学習様式 (LOPI: Learning by Observing and Pitching In) が重視され、言語的指示とは異なる足場かけの形態が機能している。ここには、異なる文化的形態 (言語的指示と観察参加) が、同じ「足場かけ」という発達の機能を果たすという、「形態的多様性と機能的共通性の併存」が見て取れる。この知見は、動的な相互調整における「最適化」の内容が、文化的背景によって根本的に異なる可能性を示している。

さらに、Sperry et al. (2019) は、複数のアメリカのコミュニティにおける自然観察データを分析し、Hart & Risley (1995) の「3000 万語の格差」が必ずしも普遍的な現象ではないことを指摘した。特に、子どもが接する言語環境は社会的経済的地位のみでは説明できず、家庭やコミュニティごとの文化的実践によって大きく異なる可能性が示された。この知見は、親子相互行為を取り巻くマクロレベルの文化的・社会的条件にも目を向ける必要性を示唆している。

これらの知見は、本論文の統合枠組みが西欧の「自律性支援・応答的養育」という価値観に偏重していないかという問いを提起させる。同時に、本論文で提示した時間スケール依存的な機能変容および動的な相互調整の視点は、文化的背景に応じて異なる形で実現される可能性を示唆している。実際、Marbell-Pierre et al. (2019) の米国とガーナでの比較研究では、同じ自律性支援であっても、「視点取得や意見交換」は両国で肯定的な効果を示したのに対し、「子どもに選択や決定を委ねること」は米国でのみ有効であり、階層性を重んじるガーナではむしろ「親のネグレクト」として否定的に機能する可能性があることが示されている。今後、本枠組みを異なる文化的背景で検証し、各文化において「どのような親子相互行為が最適とみなされるのか」という定義そのものを、文化的価値観に即して相対化することが求められる。

2. 発達の多様性と発達特性への応用

前節では、文化的背景によって親子相互行為の「最適化」の内容が異なることを示した。同様に、子どもの発達の特性によっても、最適化の内容は根本的に異なる。

親の応答性や随伴的な声かけが、全ての子どもに同じ効果をもたらすわけではない。第IV章で述べたように、La Valle et al. (2024) の ASD 児研究では、親が子どもの多様なコミュニケーション形態（音声、ジェスチャーなど）に関わらず一貫して随伴的応答を提供していることが示されている。一方、Pelham & Fabiano (2008) の ADHD 児を対象としたエビデンスに基づく治療のレビューでは、親が明確で一貫した「限界設定」(limit-setting) と「肯定的な強化」を行う構造化されたアプローチが、行動問題の改善に高い効果を示すことが報告されている。これらの知見は、本論文が提示した「動的相互調整と最適化」の概念を実証するものである。すなわち、ASD 児には「子どもの発信に対する応答的フォロー」が、ADHD 児には「明確な枠組み提示と一貫した強化によるリード」が、それぞれ最適化された応答パターンとして機能する。このように、子どもの神経発達の特性に応じて、親の声かけの「最適化」の内容自体が変容するという事実は、本枠組みの発達の多様性への応用可能性を明確に示している。

さらに、子どもの気質的特性は、否定的な相互行為パターンの形成リスクにも影響を与える。Wakschlag et al. (2007) が幼児期の破壊的行動の核として指摘するように、高い怒りやすさ (irritability) や自製の困難といった子どもの特性は行為問題のリスクとなる。さらに、こうした特性は親の厳しい

言語的統制を引き出しやすく、相互強化のサイクルを悪化させることが指摘されている。このとき、第III章で論じた親の実行機能の低さ (Deater-Deckard et al., 2010) などの要因が重なることで、否定的な相互行為パターン (強制過程) が固定化される。これはまさに、ミクロレベルでの相互調整の困難が蓄積し、マクロレベルの否定的な関係性へと波及していく「多層的時間モデル」の負の循環を示している。

これらの知見は、肯定的な支援の効果が発達特性によって異なるだけでなく、否定的なパターンの生じやすさもまた、親子双方の特性の相互作用によって決まることを示している。本枠組みは、子どもの神経発達の多様性や気質的特性を、親の「最適化」を考える際の不可欠な要素として明示的に組み込む必要がある。これは、親の応答パターンが子どもの特性に応じて調整されるという動的相互調整の考え方を、発達の多様性の観点からさらに発展させることを意味する。

3. 実践的応用と介入研究への示唆

前節までに示した文化的・発達の多様性の考察は、養育者支援の介入設計においても重要な示唆をもたらす。本節では、既存の介入研究を本論文の理論枠組みの観点から位置づけ、実践的応用可能性を検討する。

具体的には、Dishion et al. (2008) の「Family Check-Up」(FCU) は、親子相互行為のアセスメントとフィードバックを中核とし、親に「肯定的相互行為の瞬間」を示す予防的介入である。FCU が対象とするのは、本論文の分類ではメゾスケール (分単位のエピソード) での相互行為改善であり、親の意識変化を通じてマクロスケール (長期的パターン変化) へ波及させる設計になっている。同様に、Suskind et al. (2016) の「Thirty Million Words Initiative」は、従来の単純な発話量増加から、会話ターン数 (双方向性) と親の応答性改善を重視したプログラムとして、本論文が強調するミクロスケールの「随伴的応答」を親教育の中心に据えている。

これらの有望な介入事例から、第IV章で提示した多層的時間モデルは、ミクロスケール (秒単位の応答性改善) → メゾスケール (エピソード単位での親の気づき) → マクロスケール (習慣的相互行為パターンの変化) という段階的な介入設計に有用であることが示唆される。さらに重要なのは、第IV章 3 節で示した循環モデルの観点から、介入はミクロスケールからのみ開始される必要はなく、メゾスケール (FCU のようなエピソード単位での気づき) を起点としても、ミクロスケールの応答性改善とマクロスケールのパターン変化に波及するという点である。ただし、文化的・発達の多様性を考慮した柔軟な適用が不可欠である。したがって、介入設計においては、親の行動を一律に規定するのではなく、ミクロ・メゾ・マクロの各時間スケールにおける相互行為の特徴を踏まえ、個別の状況に応じて「どのレベルで何を調整するか」を判断する枠組みとして本モデルを活用する必要がある。

実践的には、この知見は養育者支援の個別化を示唆している。定型発達児には応答的会話が中心となるが、前節で論じ

たように、ASD 児には「予測可能で一貫した応答」が、ADHD 児には「明確な指示と即座的な強化」が優先されることが多いとされる。すなわち、本論文の視点は「一般的な養育者支援の枠組みに依拠するのではなく、発達的特性に応じた複数の介入戦略」を構想することの必要性を示していると言える。

4. 今後の課題と展望

本論文は、今後の理論構築に向けた概念的基盤を提示するレビューという性質上、提案した枠組みの完全な理論的精緻化には至っておらず、複数の未解決課題が残されている。理論的課題としては、潮流 E (自律性支援 vs 統制) と潮流 D (語りの共同構成) の理論的統合が不十分であり、両者がミクロ・メゾスケール上でいかなる関係にあるかが明確化されていない。また、親の個体差(実行機能、ストレス、愛着スタイル等)が相互行為の質に与える影響のメカニズムは、本枠組み内でまだ十分に理論化されていない。

実証的な課題としては、多層的時間スケール間の相互行為を検証するための新しい分析方法の開発が必要である。秒単位のターン分析、分単位のエピソード分析、年単位の発達軌跡分析を統合するマルチスケール・マルチテンポラル分析法は、現在の観察研究では実装が困難である。このような統合的分析の開発により、ミクロレベルの応答性がいかにしてメゾ・マクロレベルの発達を促進するかの因果メカニズムが明らかになることが期待される。

さらに、非西欧文化での親子相互行為研究の充実が急務である。本論文が参照した文化比較研究は限定的であり、日本、中国、韓国、中東、アフリカ各地での親子相互行為の多様な形態と、その発達の機能の文化的変異を捉える研究は未だ不足している。

結論として、第 I 章で提起した「どのような声かけが、どのような発達機能を担うのか」という問いに対し、本論文は「それは時間スケールによって異なる」という回答を提示した。親の声かけが子どもの発達に与える影響を理解するには、単一の研究潮流ではなく、秒単位の応答性から年単位のパターン形成まで、複数の時間スケールで相互行為の機能を同時に捉える必要がある。本論文で提示した「時間スケール依存的な機能変容」「動的な相互調整」「多層的時間モデル」の3つの統合的視点は、既存の相互行為研究を再編成し、より包括的で実践的な養育者支援へ寄与する理論的基礎となり得る。今後、この枠組みの文化的・発達の妥当性を検証し、多様な家族形態と子どもの多様な特性に対応した、より柔軟で適応的な養育者支援のあり方を模索することが、発達心理学と教育実践の融合的課題として位置づけられるべきである。具体的には、保育現場での養育者支援プログラムの個別化、学校での親子関係支援の設計、臨床心理支援における多様な家族への対応など、実践領域での適用と検証が必要である。

特に重要なのは、親の声かけを個別の行動単位としてではなく、時間スケールに応じて異なる機能を持つ相互行為として捉え直す視点である。この視点の転換により、養育者支援

の「一律的評価」から「時間スケールに応じた個別の評価」への新しい方向性が示唆される。理論的・実証的な課題が残されているものの、この多層的で柔軟な視点は、養育者支援のあり方を問い直す契機となり得る。

【註】

1) 本モデルが示すミクロ→メゾ→マクロへの段階的因果連鎖は、既存研究に基づいた理論的仮説であり、各時間スケール間の直接的な因果関係は実証研究で検証される必要がある。

【参考資料】

- Baddeley, A. D. (1986) *Working Memory*, Clarendon Press.
- Bodrova, E. and D. J. Leong (2007) *Tools of the Mind: The Vygotskian Approach to Early Childhood Education (2nd ed.)*, Prentice Hall.
- Deater-Deckard, K., Sewell, M. D., Petrill, S. A., and Thompson, L. A. (2010) "Maternal Working Memory and Reactive Negativity in Parenting", *Psychological Science*, Vol.21, No.1, pp.75-79.
- Dishion, T. J., Shaw, D. S., Connell, A., Gardner, F., Weaver, C., and Wilson, M. N. (2008) "The Family Check-Up with High-Risk Indigent Families: Preventing Problem Behavior by Increasing Parents' Positive Behavior Support in Early Childhood", *Child Development*, Vol.79, No.5, pp.1395-1414.
- Gibson, J. J. (1986) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Lawrence Erlbaum Associates. (Original work published 1979)
- Gilkerson, J., Richards, J. A., Warren, S. F., Montgomery, J. K., Greenwood, C. R., Kimbrough Oller, D., and Paul, T. D. (2017) "Mapping the Early Language Environment Using All-Day Recordings and *Automated Analysis*", *American Journal of Speech-Language Pathology*, Vol.26, No.2, pp.248-265.
- Hart, B. and T. R. Risley (1995) *Meaningful Differences in the Everyday Experience of Young American Children*, Paul H. Brookes Publishing Co.
- Hammond, S. I., Müller, U., Carpendale, J. I. M., Bibok, M. B., and Liebermann-Finestone, D. P. (2012) "The Effects of Parental Scaffolding on Preschoolers' Executive Function", *Developmental Psychology*, Vol.48, No.1, pp.271-281.
- Katz, I. and A. Assor (2007) "When Choice Motivates and When It Does Not", *Educational Psychology Review*, Vol.19, No.4, pp.429-442.
- Laurin, J. C. and M. Joussemet (2017) "Parental Autonomy-Supportive Practices and Toddlers' Rule Internalization: A Prospective Observational Study",

- Motivation and Emotion*, Vol.41, No.5, pp.562-575.
- La Valle, C., Shen, L., Butler, L. K., and Tager-Flusberg, H. (2024) “Are Minimally Verbal Autistic Children's Modality and Form of Communication Associated with Parent Responsivity?”, *Autism Research*, Vol.17, No.5, pp.989-1000.
 - LeVine, R. A., Dixon, S., LeVine, S., Richman, A., Leiderman, P. H., Keefer, C. H., and Brazelton, T. B. (1994) *Childcare and Culture: Lessons from Africa*, Cambridge University Press.
 - Marbell-Pierre, K. N., Grolnick, W. S., Stewart, A. L., and Raftery-Helmer, J. N. (2019) “Parental Autonomy Support in Two Cultures: The Moderating Effects of Adolescents' Self-Construals”, *Child Development*, Vol.90, No.3, pp.825-845.
 - Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., and Tuckey, M. (2001) “Rethinking Maternal Sensitivity: Mothers' Comments on Infants' Mental Processes Predict Security of Attachment at 12 Months”, *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, Vol.42, No.5, pp.637-648.
 - Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., and Tuckey, M. (2002) “Maternal Mind-Mindedness and Attachment Security as Predictors of Theory of Mind Understanding”, *Child Development*, Vol.73, No.6, pp.1715-1726.
 - Nelson, K. and R. Fivush (2004) “The Emergence of Autobiographical Memory: A Social Cultural Developmental Theory”, *Psychological Review*, Vol.111, No.2, pp.486-511.
 - Patterson, G. R. (1982) *Coercive Family Process*, Castalia Publishing Company.
 - Pelham, W. E. and G. A. Fabiano (2008) “Evidence-Based Psychosocial Treatments for Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder”, *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, Vol.37, No.1, pp.184-214.
 - Peterson, C. and A. McCabe (1992) “Parental Styles of Narrative Elicitation: Effect on Children's Narrative Structure and Content”, *First Language*, Vol.12, No.36, pp.299-321.
 - Rogoff, B., Callanan, M. A., Gutiérrez, K. D., and Erickson, F. (2016) “The Organization of Informal Learning”, *Review of Research in Education*, Vol.40, No.1, pp.356-401.
 - Romeo, R. R., Leonard, J. A., Robinson, S. T., West, M. R., Mackey, A. P., Rowe, M. L., and Gabrieli, J. D. E. (2018) “Beyond the 30-Million-Word Gap: Children's Conversational Exposure is Associated with Language-Related Brain Function”, *Psychological Science*, Vol.29, No.5, pp.700-710.
 - Scaramella, L. V., Neppl, T. K., Ontai, L. L., and Conger, R. D. (2008) “Consequences of Socioeconomic Disadvantage Across Three Generations: Parenting Behavior and Child Externalizing Problems”, *Journal of Family Psychology*, Vol.22, No.5, pp.725-733.
 - Sperry, D. E., Sperry, L. L., and Miller, P. J. (2019) “Reexamining the Verbal Environments of Children from Different Socioeconomic Backgrounds”, *Child Development*, Vol.90, No.4, pp.1303-1318.
 - Suskind, D. L. (2015) *Thirty Million Words: Building a Child's Brain*, Dutton.
 - Suskind, D. L., Leffel, K. R., Graf, E., Hernandez, M. W., Gunderson, E. A., Sapolich, S. G., and Levine, S. C. (2016) “A Parent-Directed Language Intervention for Children of Low Socioeconomic Status: A Randomized Controlled Pilot Study”, *Journal of Child Language*, Vol.43, No.2, pp.366-406.
 - Tamis-LeMonda, C. S., Bornstein, M. H., and Baumwell, L. (2001) “Maternal Responsiveness and Children's Achievement of Language Milestones”, *Child Development*, Vol.72, No.3, pp.748-767.
 - Tamis-LeMonda, C. S., Kuchirko, Y., and Song, L. (2014) “Why is Infant Language Learning Facilitated by Parental Responsiveness?”, *Current Directions in Psychological Science*, Vol.23, No.6, pp.385-390.
 - Thelen, E. and L. B. Smith (2006) “Dynamic Systems Theories”, in R. M. Lerner and W. Damon (Eds.), *Handbook of Child Psychology: Theoretical Models of Human Development* (6th ed., Vol.1), Wiley, pp.258-312.
 - Tomasello, M. and M. J. Farrar (1986) “Joint Attention and Early Language”, *Child Development*, Vol.57, No.6, pp.1454-1463.
 - Tompkins, V., Benigno, J. P., and Kates, A. E. (2018) “The Relation Between Parents' Mental State Talk and Children's Social Understanding: Mediation Through Children's Mental State Talk”, *Developmental Psychology*, Vol.54, No.12, pp.2237-2246.
 - Tulving, E. (2002) “Episodic Memory: From Mind to Brain”, *Annual Review of Psychology*, Vol.53, pp.1-25.
 - Turvey, M. T. (1992) “Affordances and Prospective Control: An Outline of the Ontology”, *Ecological Psychology*, Vol.4, No.3, pp.173-187.
 - Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes*, Harvard University Press.
 - Wakschlag, L. S., Briggs-Gowan, M. J., Carter, A. S., Hill, C., Danis, B., Keenan, K., and McCarthy, K. J. (2007) “A Developmental Framework for Distinguishing

Disruptive Behavior from Normative Misbehavior in
Preschool Children”, *Journal of Child Psychology and
Psychiatry*, Vol.48, No.10, pp.976-987.